

A HISTORY OF THE ENGLISH LANGUAGE(§ § 111-130)

1. Summary

§ 111. Middle English a Period of Great Change.

中英語期には、英語の語彙において、より広範囲で基礎的な変化が絶え間なく起こった。それらのいくつかはノルマン人の征服の結果であり、その出来事の後に続く状況によるものであった。その一方で、古英語の時点から現れ始めた傾向が続いたことによる変化もあり、これらはノルマン人の侵略によって早く進行していった。この期間の変化は、音韻体系、文法、語彙において英語に影響を及ぼした。文法における変化は音韻論的な変化と結びついており、英語を非常に屈折した言語から、非常に分析的な言語へと変えた。語彙における変化は、古英語が持つ単語のストックの大部分の損失と、フランス語とラテン語からの何千もの借用語をもたらした。

§ 112. From Old to Middle English.

古英語から中英語への変化に伴う発音の変化は、非常にわずかである。一部の有声子音が無声になることもあればその逆もあり、子音は時には消失することもあった。しかし、単語の子音の枠組みに大きな変化はなかった。また、アクセントがつく音節の母音の質に大きな変化もなかった。ほとんどの短母音は変化することなく中英語に引き継がれた。古英語の二重母音は全て簡略化され、中英語の全ての二重母音は主に単純な母音とそれに続く子音を組み合わせた新しい形態を持つこととなった。

§ 113. Decay of Inflectional Endings.

英語の文法における変化は、屈折の一般的な減少として説明できる。名詞の屈折語尾や形容詞の数と格の区別、性別の区別では、発音が大きく変化した。このことは動詞にも当てはまる。屈折語尾の水平化は、一部は音声の変化によるものであり、一部は類推の作用によるものであった。音声の変化は単純であるが広範囲に及んだ。これらの変化の痕跡は、10 世紀前半に古英語の写本で発見されている。12 世紀の終わりまでに、これらは一般化された。

§ 114. The Noun.

-s が複数を表す活用語尾であると見られるようになったように、中英語期には類推による活用語尾の削減が起こった。したがって、今日の名詞と同じ名詞の変化が見られる。初期の中英語では、複数形を示す 2 つの方法が強い特徴を持つ。それは、男性強形からくる -s もしくは -es と、弱形からくる -en である。13 世紀まで、南部では -en が複数を表す活用語尾として好まれた。しかし、他の地方では -s が区別しやすいとして好まれ、急速に広まるようになっていった。古英語でも、もともと違う形だったものが、北部方言の変化へと移行することが多くあった。1200 年までに -s が複数形として北部と北中部で一般化し、他の形は例外となった。50 年後には他の地域にも広がり、14 世紀の終わりにはイングランド全域で -s が複数形として完全に共通認識されるようになった。

§ 115. The Adjective.

形容詞において形態の水平化はさらなる大きな結果を招いた。単数主格形は早期に単数形全てに、複数主格形は複数形全てに、強変化・弱変化共に適用された。やがて弱変化において単数と複数の違いが無くなり、-e で終わるようになった。1250 年までに強変化において、ある短音節の形容詞に限って単数と複数で違った形を持つようになった。そうしていく中で形容詞の末尾はしばしば文法的な意味を持たなくなった。-e 以外の屈折語尾は中英語期の終わりまでに衰退していった。

§ 116. The Pronoun.

屈折の衰退にともない、文中の語の関係を明白にするため、性・格・数よりも並び順や前置詞の使用に重きが置かれるようになった。代名詞では最終音節が弱まったことで屈折が衰退し、名詞や形容詞の末語の減少に影響を与えた。一方で、人称代名詞においては屈折の消失はそこまで大規模ではなく、古英語にあったほとんどの区別は保持された。しかし、与格形と対格形は一般的に与格に結合された。また、中性の対格 *it* は一般目的格になった。その他の単純化としては両数の喪失が挙げられる。三人称複数、*they, their, them* は Scandinavian の影響があると考えられており、中英語期の終わりまでに標準英語で一般的な形として定まった。

§ 117. The Verb.

中英語期の主な動詞の変化としては強変化の喪失が挙げられる。名詞、形容詞から出来たものや、他言語から借用された動詞は一般的に弱変化であった。ゆえに強変化は徐々に少数派となっていった。ノルマン征服後、この動きは一層強まった。生き残った強変化も弱変化の影響を受け、やがて弱変化へと変わっていった。

§ 118. Losses among the Strong Verbs.

古英語の強変化動詞のうち約 3 分の 1、つまり 100 個以上が中英語期の初期に消失したと考えられる。そのうち約 90 個は 1150 年以降記録書に見受けられず、この動きはその後も続いた。さらに 30 個が中英語期に廃れ、16 世紀や 17 世紀で使われていた 30 個はついに方言を除き姿を消してしまった。それらは無くなった後、弱変化になったり、強変化形をもちつつ弱変化形を発達させていったりした。今日、古英語の強変化動詞の半数以上が標準英語から完全に消失した。

§ 119. Strong Verbs That Became Weak.

弱変化動詞のパターンを、歴史的な強変化動詞に適用することが、当時の人々にとっても普通であった。この傾向は古英語にもみられる。例えば、*rædan* や *sceððan* は古英語においてすでに弱くなっていた。13 世紀には、この傾向は書き言葉にみられるようになり、14 世紀にはこの動きは絶頂を迎えた。この後、若干の変化が起こり、15 世紀にはおよそ 12 の弱変化動詞が見られるようになる。弱形になった多くの動詞は、強変化動詞からいきなり変わったものではない。弱変化動詞が成長している間や、完全に確立したのちも、強変化動詞は使われ続けた。例えば、*ache* の過去形である *oke* の例がある。このように一般的には弱系が取って代わるようになるが、弱系の代わりに強形が今も残っていたり、または二つとも残っている動詞もある。

§ 120. Survival of Strong Participles.

強変化動詞の過去分詞は、その過去形よりも頑強であるように見える。いくつかの動詞においては、弱系の分詞は後になって現れ、動詞が弱変化動詞となってから強形がよく使われるようになった。

§ 121. Surviving Strong Verbs.

動詞の不規則性は言語に困難を引き起こすため、強変化動詞の喪失はむしろ進歩として考えられるべきである。強変化動詞の生き残りは、古英語におけるその主要な部分の正常な発展を表す形として現在に至ることは減多にない。現代に残っている単数形の形は基本的に、複数形や過去分詞の母音に取って代わられている。その一つとして、*bindan* の例がある。

§ 122. Loss of Grammatical Gender.

屈折の腐敗によって生まれた結果の一つとして、文法性の排除がある。古英語における名詞の性は一般的に、語形

変化によって示されるのではなく、強形の形容詞や指示詞の一致によって示される。屈折の衰退と、文法性の混乱と喪失は同時に発生した。北では屈折が弱まったのち文法性が消えた一方、南では屈折の腐敗がゆっくり進んだため長く残り続けている。

§ 123. Middle English Syntax.

屈折語尾の水平化の結果によって統語論的關係と意味論的關係はあいまいになった。古英語においては文法機能を持つ二つの結果を表す名詞ははっきりとしていたが、中英語になるとその機能は不確かなものとなる。このようなあいまいさを回避する最も直接的な方法は可能となりえる語順を制限することである。この過程は Peterborough Chronicle に見ることができる。ほかにも主語と動詞の語順にもこの発展の過程を見ることができる。したがって屈折体系が現代英語のように見えた場合、それと同時に語順体系は古英語のように見える。これらの変化はフランス語との接触の結果起こったものではない。

§ 124. French Influence on the Vocabulary.

屈折の現象や、英文法の簡略化がフランス語から間接的な影響しか受けなかった一方で、語彙面に関しては直接的な影響をフランス語から受けていた。この動きには 1250 年を境界とする前期と後期に分けることができる。前期の借用は後期に比べその種類は少ない。1250 年以前に借用された約 900 語の言葉は、当時の下級民が慣れ親しんだ語である。1250 年以後に借用された後期の語彙は新しく力強い要因によって成された側面がある。それはフランス語を習慣的に話していた人々がだんだんと英語を使用するようになっていったというものである。当時の上級民たちは、驚くべき数の一般的なフランス語を英語に借用し、その中には政治的・行政的な単語を多く含んでいた。

§ 125. Governmental and Administrative Words.

英語が多く政治的、そして行政的な単語をフランス語から借りてきたことを私たちは認識する必要がある。密接に government という考えに結び付いた単語だと subject, allegiance などがある。office という単語や多くの官職の名前も同じくフランス語由来のものである。king, queen, lord などの単語を除けば階級を表す単語である noble, nobility などもフランス語からの借用である。しばしば政治的・行政的側面を持ち社会の経済組織を示す manor などの単語もそのひとつである。

§ 126. Ecclesiastical Words.

協会における重要な役職はノルマン人が担ったため、それに関する英語語彙の中にフランス語の語彙を見つけることができる。例えば religion (他 13 語) や、あるいは creator, mystery, faith (他 27 語) といった基本的宗教的概念を表す単語もフランス語起源で、pray と言った動詞もここに含まれることになる。

§ 127. Law.

法廷で使用された言語であったため、英語の法律用語の大部分はフランス語由来のものとなっている。本来語が変わって justice, judgement, crime が採用されている点がこの一例であり、加えて古英語より生き残った単語もその専門性は失われている。先述の例以外では jury, evidence, verdict, sentence (他 34 語) が挙げられ、それ以外にも法的措置等に関連した動詞 arrest (他 23 語) や、多数の犯罪の名称、また財産などに関わる property (他 15 語)、或いは innocent (他 2 語) のような明らかに法的な意味を持つ形容詞もその一様である。

§ 128. Army and Navy.

当時、陸海軍の指揮権はフランス語話者の手中にあったことなどから、フランス語由来の軍事用語も英語に散見される。例えば army, navy, enemy (他 14 語) や、captain (他 2 語) といった将校の名称もフランス語であ

る。また当時からの軍事的な意味を失いながらも今日に至るまで使用されている単語も存在している。

§ 129. Fashion, Meals, and Social Life.

上流階級の人々が、言わずもがな衣服の流行や服装の模範であったため、多くのフランス語がそれらを表す語として残っている。そもそも fashion, dress という単語そのものもフランス語由来であるし、他にも上流階級の暮らしと結びついた単語が数多存在している。加えて日常生活における便利品や、娯楽関連の語彙にもフランス語が見受けられる。これらの莫大な例から、家庭生活や社会的側面における英語語彙へのフランス語の恩恵を見て取ることができる。

§ 130. Art, Learning, Medicine.

支配者階級の文化的・知的関心は芸術、建築、文学、学問、科学、そして医学に反映されている。例えば art, music, beauty, color は典型的な芸術に関する語彙であり、対して tower, pillar, base (他 21 語) に代表される語彙は建築に関連したものである。文学は literature という語そのものがフランス語であり、romance, story, title, poet, paper, pen などと同様である。学問関連では logic, study, grammar (他 9 語)、科学および医学では medicine を筆頭に、physician, stomach, poison, pain, plague (他 27 語) がフランス語起源である。これらの例から、いかに芸術と科学においてフランス語語彙が重要な役割を担うかがわかる。

2. Research

- ・当時英語に多大な影響を与えたフランス語には大方 2 つの方言が存在している。一つは 1250 年頃までの借用語に見受けられるノルマン人の使用していた Norman French (NF) で、もう一つはパリ周辺の方言である Central French (CF) である。これらは主に子音が異なっており、フランス語からの借用語にもその対応関係を示す例がある。例えばラテン語の c/k/ の後ろに a が存在する場合、NF では /k/ が保持されたのに対し、CF では /tʃ/ へと変化している。そのため L.capitare は、それぞれ NF.cachier, CF.chacier となり、その後前者は英語の catch, 後者は chase となった。また、NF の /w/ は CF では /g/ と対応しているため、英語には両者より借用をしたために生じた warranty と guaranty のような二重語 (doublet) のペアも存在している。
- ・フランス語からは単語のみならず句表現もいくつか借用されている。借用句表現のうち 60% 程が今日に残っており、中世的文物・制度に発するもの (e.g. cry mercy 'homage and fealty*') が大半であるが、from word to word → word by word の様に改変されたものなども存在している。

*homage and fealty はそれぞれ「臣従の誓い」「誠実の誓い」の 2 つを表す中世西欧における封建制での臣従義礼のこと。

3. Question

- ・§ 113 にあるように、人は記憶を楽にするため不規則な型を、なるべく規則的な型に揃えようとする傾向があり、これを「類推」と言う。日本語において類推による言葉の形態変化にはどのようなものがあるだろうか。

4. Bibliography

大槻博・大槻きょう子『英語の語彙に与えた外国語の影響』燃焼社, 2010 年, pp.58-60.

堀田隆一 (2009) 「hellog~英語史ブログ」, <<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-07-13-1.html>>, (参照 2019-12-9)

大泉昭夫 (編)『英語史・歴史英語学：文献解題書誌と文献目録書誌』(英語学文献解題 第 3 巻)研究社, 1997 年, pp.107-108.

F.W.メイトランド (著), 小山貞夫 (訳)『イングランド憲法史』創文社, 1981 年, p.37.